比　恵 69

― 比恵遺跡第128次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1273集

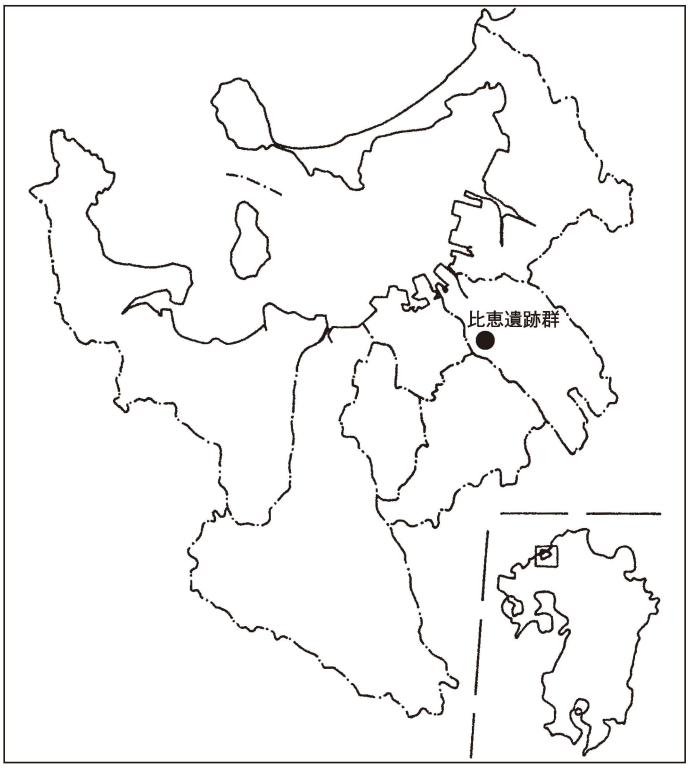
２０１５

福 岡 市 教 育 委 員 会

比　恵 69

― 比恵遺跡第128次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1273集



遺跡略号　HIE－128
調査番号　1302

2015

福岡市教育委員会

序

北部九州は玄海灘を介して大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方ながら交流が絶え間なくおこなわれてきました。なかでも福岡市には、旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は事務所建設に伴う比恵遺跡群第128次発掘調査について報告するものです。この調査では古墳時代の遺構を検出するとともに、古墳時代後期から古代にかけての遺物が多数出土しました。

これらは地域の歴史の解明のためにも重要な資料となるものです。今後本書が文化財保護についての理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、東京機器株式会社様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

平成27年３月25日

福岡市教育委員会

教育長　酒井　龍彦

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が福岡市博多区博多駅南６丁目19－2において発掘調査を実施した比恵遺跡群第128次調査の報告書である。
2．発掘調査および整理･報告書作成は、民間受託事業として実施した。
3．報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4．本書に掲載した遺構、遺物実測図の作成は、清金良太が行った。
5．本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、清金が行った。
6．本書に掲載した挿図の製図、執筆および編集は、清金が行った。
7．本書に掲載した国土座標値は、世界測地系によるものである。
8．本書で用いた方位は磁北で、真北より6°21′西偏する。
9．遺構の呼称は、溝をSD、土坑をSK、ピットをSP、包含層をSXと略号化した。
10．遺物番号は通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
11．本書に関わる記録･遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。

遺跡名	比恵遺跡群	調査次数	第128次	遺跡略号	HIE－128
調査番号	1302	分布地図図幅名	東光寺37	遺跡登録番号	0127
申請地面積	211.57㎡	調査対象面積	102.0㎡	調査面積	109.0㎡
調査地	福岡市博多区博多駅南６丁目19－２			事前審査番号	24－2－1097
調査期間	平成25(2013)年４月８日～５月16日				

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・1
　1．調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・1
　2．調査の組織・・・・・・・・・・・・・・1
Ⅱ．遺跡の立地と環境・・・・・・・・・・・・2
Ⅲ．調査の記録・・・・・・・・・・・・・・・5
　1．調査の概要・・・・・・・・・・・・・・5
　2．遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・5
　　1）溝(SD)・・・・・・・・・・・・・・5
　　2）土坑(SK)・・・・・・・・・・・・・5
　　3）その他の遺物・・・・・・・・・・・8
Ⅳ．結語・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

挿　図　目　次

第１図　比恵遺跡群位置図(1/25,000)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
第２図　恵遺跡群調査区位置図(1/1,000)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第３図　第128次調査区遺構配置図(1/80)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
第４図　SD002実測図(1/60) SK007実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3)・・・・・・・・・7
第５図　SK018・024・039・044実測図(1/40) および出土遺物実測図(1/3)・・・・・・・・・・・8
第６図　ピット出土遺物実測図(1/3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
第７図　SX001出土遺物実測図(1/3)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
第８図　SX001出土遺物実測図(1/3、47･48･50･51は1/2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第９図　第128次調査で検出された溝(1/1,000)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

図　版　目　次

図版１　第128次全体写真（北から）
　　第128次全体写真（南から）
　　SK007完掘状況（南から）
図版２　第128次出土遺物

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

平成25（2013）年２月12日、東京機器株式会社より、福岡市経済観光文化局埋蔵文化財審査課に博多駅南６丁目19－２における事務所の新築に伴う埋蔵文化財事前審査についての照会が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群の南部にあたり、申請地の北東側では1997年に第63次調査、東側では第74次調査が行われている。同課はこれを受けて平成25年２月28日に試掘調査を行った。現況は更地で、建物建設予定地の中央部にトレンチを設定した。調査の結果、現地表面下110㎝の八女粘土上面で遺構を確認した。申請者と同課は文化財保護に関する協議をもったが、事務所が建設される部分のうち102㎡を対象に記録保存調査のための発掘調査を行うこととなった。調査は平成25（2013）年４月８日から５月16日まで行われた。

２．調査の組織

調査委託：東京機器株式会社
調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：平成25年度・資料整理：平成26年度）
調査総括：埋蔵文化財調査課　課長　宮井善郎（25年度）
常松幹雄（26年度）
同課調査第２係長　榎本義嗣
庶　　務：埋蔵文化財審査課　管理係長　和田安之（25年度）
内山広司（26年度）
管理係　横田　忍
事前審査：埋蔵文化財審査課　課長　米倉秀紀
事前審査係長　加藤良彦（25年度）
佐藤一郎（26年度）
同課事前審査係主任文化財主事　佐藤一郎（25年度）
池田祐司（26年度）
同課事前審査係文化財主事　森本幹彦（25年度）
板倉有大（26年度）
調査担当：埋蔵文化財調査課　文化財主事　清金良太
発掘調査：唐島栄子・水田ミヨ子・上野照明・富岡洋子・水田政敏
整理作業：木本恵利子・窪田 慧・松尾真澄

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について施主をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事に終了することができました。ここに深く感謝します。

Ⅱ．遺跡の立地と環境

比恵遺跡群は福岡平野のほぼ中央に位置しており、隣接する那珂遺跡群と共に東側は御笠川、西側は那珂川に挟まれた丘陵上に位置する遺跡である。那珂遺跡群とは浅い谷によって区分されている。比恵遺跡群の立地する丘陵は、かつての沖積作用によって細かい谷が複雑に入り込む丘陵であり、今回の調査地点は丘陵の西斜面に位置している。また、この台地の南側は春日丘陵と連なり、那珂遺跡群、井尻遺跡群、さらに南には須玖岡本遺跡群を中心とした遺跡群が広がる。比恵遺跡群の立地する台地は花崗岩の風化礫層を基盤に、その上に粗砂、細砂、腐食土層、阿蘇山の火砕流による八女粘土層・鳥栖ローム層が形成される。比恵遺跡群は主に鳥栖ローム層の上面から掘削されるが、第128次調査では鳥栖ローム層の最下層、もしくは八女粘土層からの掘削となった。これは那珂遺跡群との境である浅い谷が関係しているのであろう。

比恵遺跡群において、初めに遺構が確認されるのは弥生時代前期であるが、後期旧石器時代ナイフ型石器や彫器が台地辺縁の比恵第19次、那珂第38・41次調査で検出されている。縄文時代も同様であり、前期の深鉢が比恵第30次調査から出土している。弥生時代に入ると那珂第37次調査では２重環濠が掘削されている。比恵遺跡では北西部を中心に、貯蔵穴などが見つかっている。

弥生時代中期に入ると竪穴住居・貯蔵穴等が各地に広がると共にこの頃から甕棺墓の形成も始まる。弥生時代中期後半になると、比恵第58次などで検出された南北方向の区画溝が縦断し、その周辺には掘立柱建物が配置され、青銅器生産関連遺物や舶載金属器が多く出土している。

弥生後期に入ると竪穴住居等の遺構は低調になるが、井戸等の掘削は引き続き行われている。弥生終末期から古墳時代初頭にかけて竪穴住居の数は大幅に増える。また、大溝の一部が確認されており、集落を囲むような環濠が確認されている。さらに、比恵第45・62・99次調査等では陵上を直線的に走る並列した２本の溝が確認されている。この２本の溝の間は、基本的に同時期の遺構が極めて少ない。また、溝は那珂遺跡まで続いており、丘陵上を南北に走っており、総延長は1.5㎞をこえている。２本の溝の間に舗装面こそ確認されていないが、道路状遺構の可能性が指摘されている。溝を掘削した年代の上限は弥生時代後期後葉であり、古墳時代初頭を通じて溝としての機能を果たしていたことが、出土した土器からうかがえる。この道路が首長居館との関連が指摘されている２号方形環溝や墓域等の配置に影響を与えたことが分かっている。

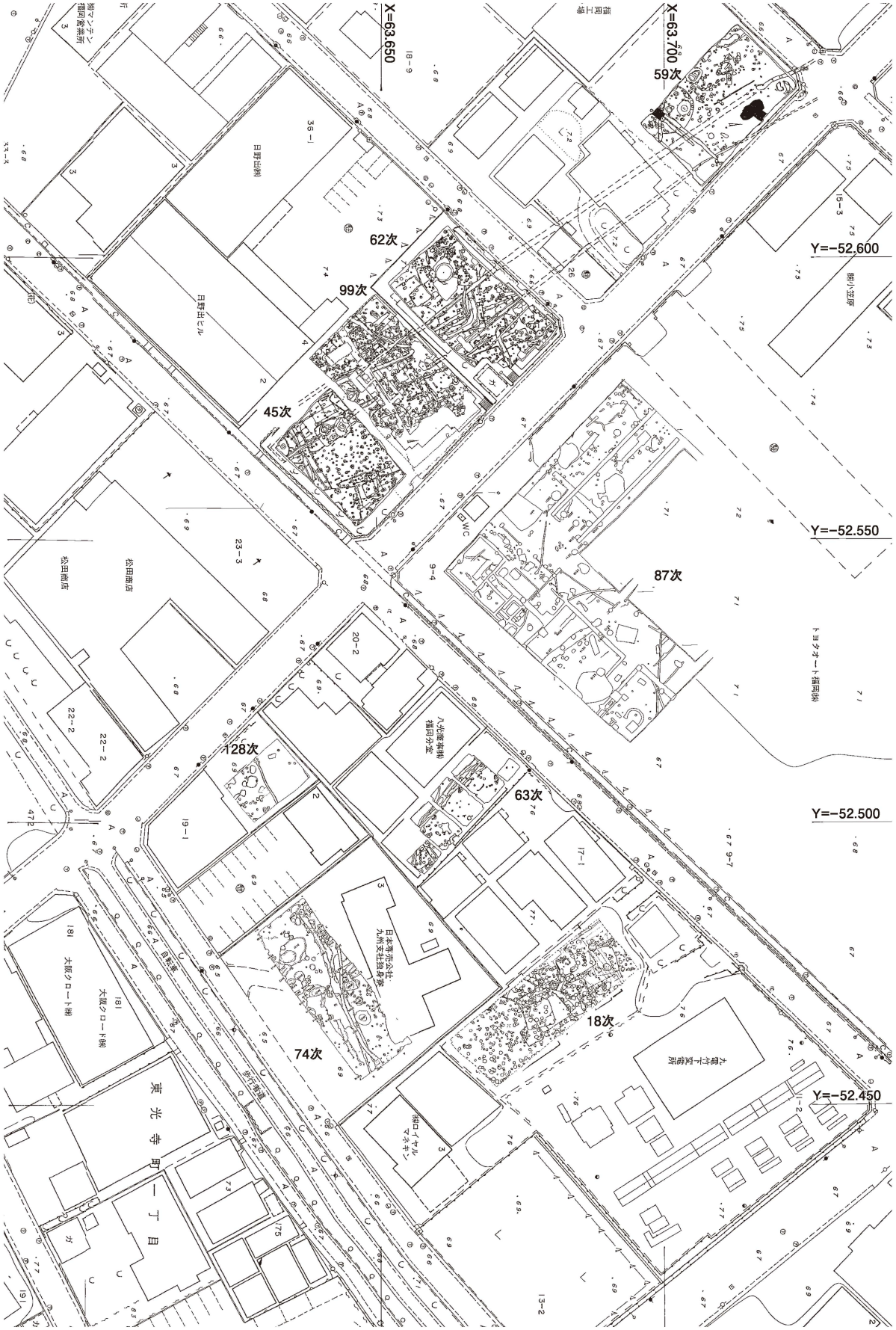
古墳時代後期には剣塚北古墳の造営を契機として、阿蘇凝灰岩製の石屋形をそなえた横穴式石室を持つ前方後円墳である東光寺剣塚古墳が位置している。また、古墳時代後期後半以降、大型の掘立柱建物や柵列が見つかっており、日本書紀宣化天皇元年（536年）条にみえる「那津官家」との関連が指摘されている。また、南側に位置する那珂遺跡群についても比恵遺跡群と同様に、少し遅れて掘立柱建物群が確認されている。那珂遺跡群第19・24次等ではこのころ出土する初期瓦は、比恵遺跡群では出土せず、掘立柱建物との関連が指摘されている。

古代以降、比恵遺跡群で確認できる遺構の数は激減しており、集落の中心は那珂遺跡群に移行する。

比恵遺跡、那珂遺跡群周辺の遺跡では、板付遺跡があり、日本最古の水田遺跡、弥生時代前期の環濠集落などがあり、弥生時代前期末の甕棺墓から細形銅剣・銅矛が出土している他、弥生時代後期の竪穴住居からは小銅鐸が出土し、国指定史跡となっている。さらに南側の井尻遺跡では弥生時代の集落と甕棺墓が検出され、青銅器生産関連遺構やガラス勾玉鋳型が出土し、工房があったとされている。また、７世紀末から８世紀初頭には寺院・官衙遺構が営まれている。

1	**比恵遺跡群**	2	那珂遺跡群	3	山王遺跡群	4	雀居遺跡	5	那珂君休遺跡群
6	板付遺跡	7	高畑遺跡	8	五十川遺跡群	9	諸岡A遺跡群	10	諸岡B遺跡群
11	下月隈C遺跡群	12	立花寺B遺跡群	13	井相田D遺跡群	14	仲島遺跡群	15	井相田C遺跡群
16	井尻B遺跡群	17	三筑遺跡	18	麦野A遺跡群	19	麦野B遺跡群	20	麦野C遺跡群
21	南八幡遺跡群	22	須玖遺跡群						

第１図　比恵遺跡群位置図(1/25,000)



第２図　比恵遺跡群調査区位置図(1/1,000)

Ⅲ．調査の記録

１．概要

今回報告する比恵遺跡群第128次調査区は、博多区博多駅南６丁目19-2に所在し、調査前の現況は標高約6.6ｍを測る、家屋解体後の平地であった。調査地点は遺跡の南東端に位置しており、すぐ南側には那珂遺跡群が立地している。南東側では74次調査、北東側では63次調査、18次調査、北東側では87次調査、北側では45次調査、62次調査、99次調査が行われており、北側の3つの調査地点では弥生時代終末期の道路が検出されている。更にその周辺でも数多くの調査が実施されている。

遺構検出は遺構面上面までを重機で剥ぎ取って実施したが、包含層が残る南部については、その上面までにとどめ、以下は人力によって作業を行った。今回の調査では、古墳時代後期の溝、土坑を主体として確認できたが、古代のピットも散見する。また、南側の黒褐色シルト層から包含層が検出され多くの遺物が出土した。出土遺物量は、コンテナケースにして17箱である。

発掘調査は平成25（2013）年４月８日に着手した。まず、重機による表土剥ぎ取りから開始し、翌日に発掘器材やリース器材を搬入した。その後、外柵設置や壁面清掃、遺構面保護、世界測地系によるトラバース杭の設定等を実施し、10日から遺構検出を開始した。順次、西側から検出遺構の掘り下げや写真撮影、１/20縮尺を主体とする図化、遺物取り上げ、周辺測量等の作業を進め、遺構の掘削作業がほぼ終了した５月10日に全体写真の撮影を行った。その後、残る図化作業や個別遺構写真撮影、片付け、重機による埋め戻し等を終え、５月16日に第125次調査を完了した。

なお、調査対象面積は、「Ⅰ.－１.調査に至る経緯」のとおり、102㎡であった。調査時の遺構番号は、001から３桁の通し番号を遺構の種別に関わらず付した。それらの番号には、欠番があるものの、重複はない。以下の報告にあたっても、原則的に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述するが、掘立柱建物を構成する柱穴や竪穴住居内の施設については、報告の便宜上必要に応じて遺構毎にＰ１から順に番号を付した。

２．遺構と遺物

以下、遺構種別ごとに報告を行うが、調査区での遺構位置を本文中で示す際には、調査時における世界測地系による５ｍ単位の平面座標を基準とした英字（西から東にＡ～Ｂ）と数字（北から南に１～２）の組み合わせによるグリッド表記を用いる（第３図参照）。

１）溝(SD)

SD002（第３・４図）Ａ－２区、Ｂ－１区で検出した。長さは約7.0m、幅は約0.25m、深さは約0.05ｍほどであった。南東側で行われた第74次調査区のSD03と繋がる可能性がある。

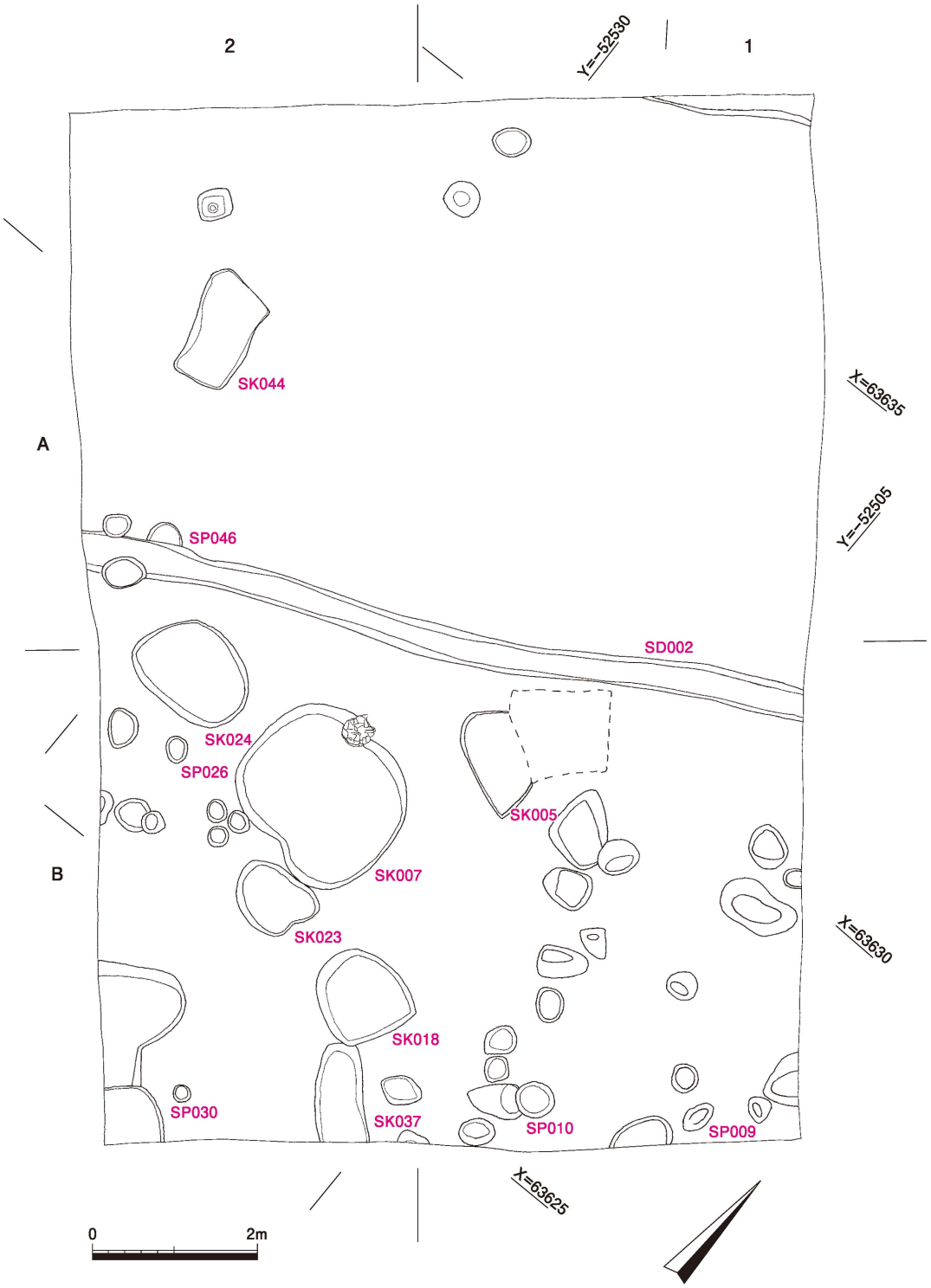
出土遺物（第４図）

１は須恵器の坏である。残存高は約2.6ｃｍ、底部の径は約9.6ｃｍである。２、３は土師器の甕である。２は残存高約3.9ｃｍ、底部の径は約7.4ｃｍである。３は残存高約4.1ｃｍ、底部の径は約7.8ｃｍである。器面は２、３ともに風化が激しい。

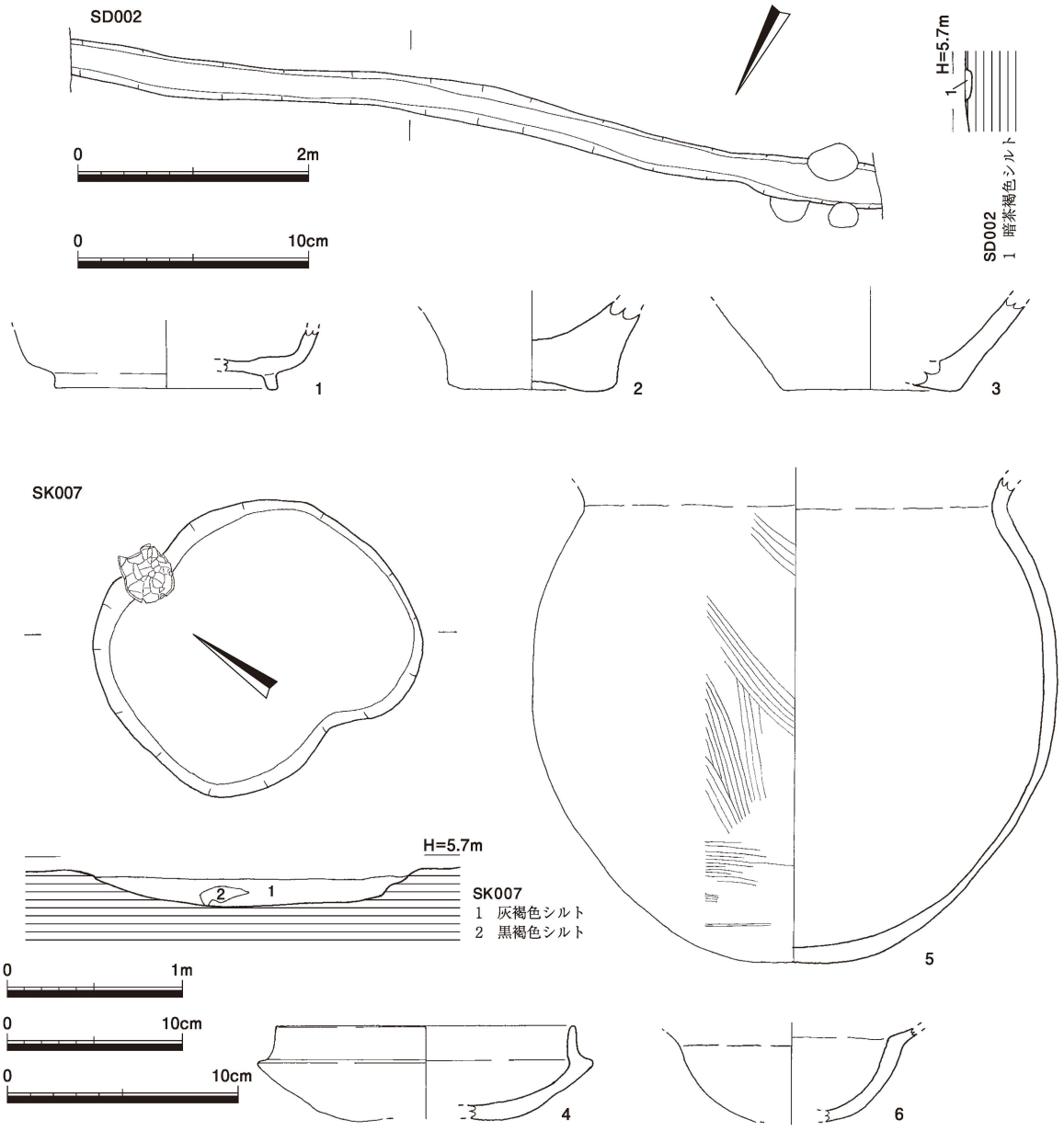
２）土坑(SK)

SK007（第３・４図）Ｂ－２区で検出した。幅は東西約1.6m、南北約1.2m、深さが約0.13ｍを測る。初めは井戸と考え掘削していたが、底が浅く八女粘土上面で底となった。水の湧水も無かったので土坑とした。古墳時代後期のものである。

出土遺物（第４図）



第３図　第128次調査区遺構配置図(1/80)



第４図　SD002実測図(1/60)SK007実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

４は須恵器の坏である。残存高は約4.1ｃｍ、口径は13ｃｍ、幅は14.6cmである。５、６は土師器である。

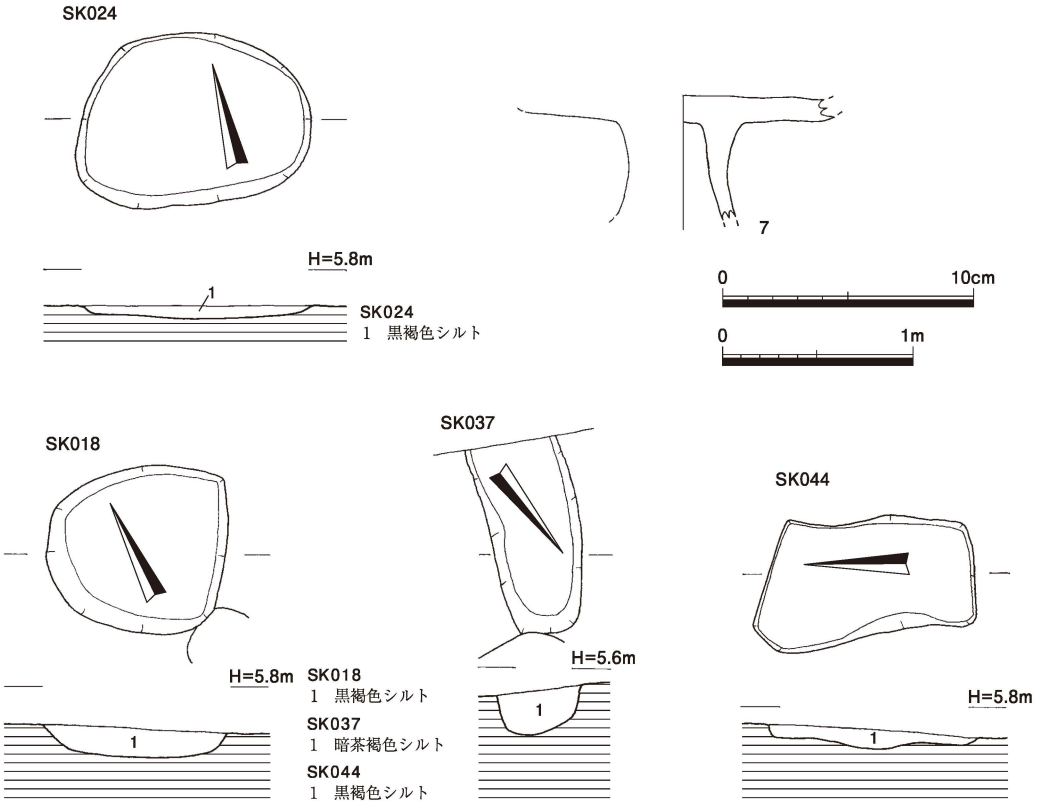
５は壺で高さは約28.4ｃｍ、最大径は約30.2ｃｍがのこる。外面に刷毛目調整がみられる。６は小型の壺である。高さは約4.1ｃｍ、幅は約5.4ｃｍが残る。

SK024(第３・５図) Ｂ－２区で検出した。幅は東西1.2m、南北約0.96m、深さは約0.08ｍを測る。古墳時代後期のものである。

出土遺物(第５図)

７は須恵器の高坏である。高さは約５ｃｍ、幅は約11.8ｃｍが残る。

SK018(第３・５図) Ｂ－２区で検出した。幅は東西約0.96m、南北約0.88m、深さは約m0.16を



第５図　SK018・024・039・044実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

測る。遺物は図化できなかったが、古墳時代後期から古代にかけてのものであろう。

SK039(第３・５図) Ｂ－２区で検出した。幅は東西約0.44m、深さは約0.24mを測る。遺物は細片が多く図化できなかったが、SK018と同じく古墳時代後期から古代にかけてのものであろう。

SK044(第３・５図) Ａ－２区で検出した。幅は東西約0.64m、南北約1.08m深さは約0.1mを測る。

３）その他の遺物

最後にピット（SP）、包含層001（SX）の遺構検出時の出土遺物について報告を行う。

ピット(SP)

SP005(第３・６図) Ｂ－１区で検出した。８、９は須恵器の坏である。８は高さ約３ｃｍ、底径約9.4ｃｍを測る。脚部に刻み目が残る。９は高さ約1.3ｃｍ、底径は約10ｃｍが残る。

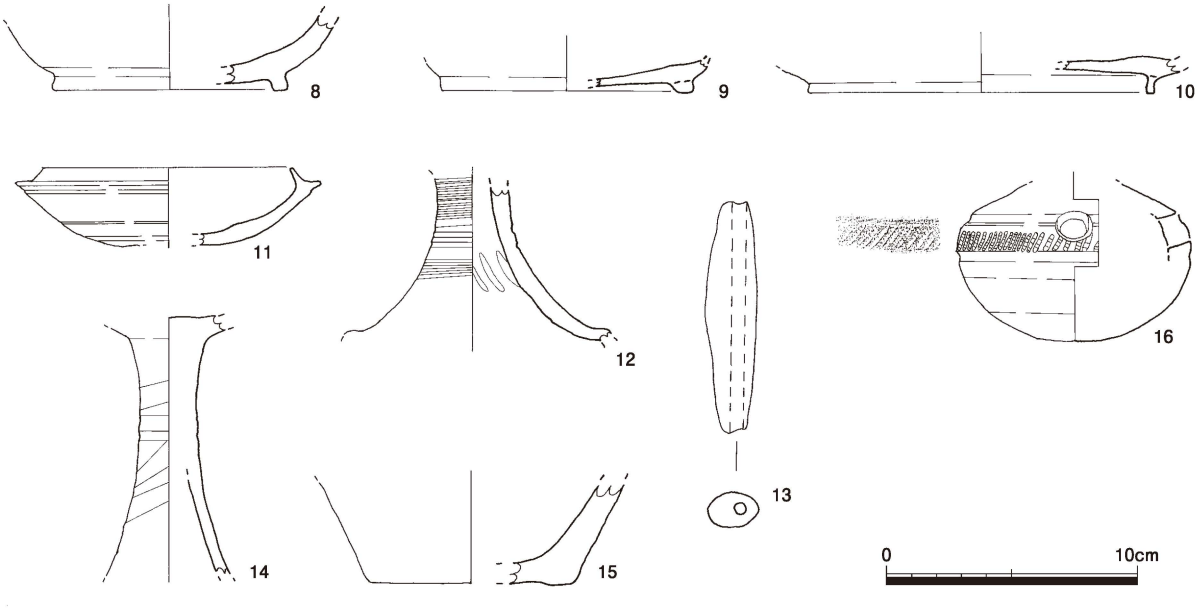
SP046(第３・６図) Ａ－２区で検出した。10は須恵器の坏である。高さは約1.5ｃｍ、底径は約14ｃｍが残る。

SP010(第３・６図) Ｂ－１区で検出した。11、12は須恵器である。11は坏である。高さは約3.1ｃｍ、口径は10ｃｍ、幅は12.2ｃｍである。12、は高坏である。12は高さ約6.5ｃｍ、幅は約10.6ｃｍである。外面上部はカキ目、下部は回転ナデを施す。内面は絞りの後回転ナデを施す。13は土錘である。高さは6.1ｃｍ、幅は1.4ｃｍである。

SP023(第３・６図) Ｂ－２区で検出した。14は須恵器の高坏である。高さは約10.3ｃｍ、幅は約５ｃｍである。

SP026(第３・６図) Ｂ－２区で検出した。15は土師器の甕である。高さは約４ｃｍ、幅は約８ｃｍが残る。

SP009(第３・６図) Ｂ－１区で検出した。16は須恵器のハソウである。高さは約6.2ｃｍ、幅は



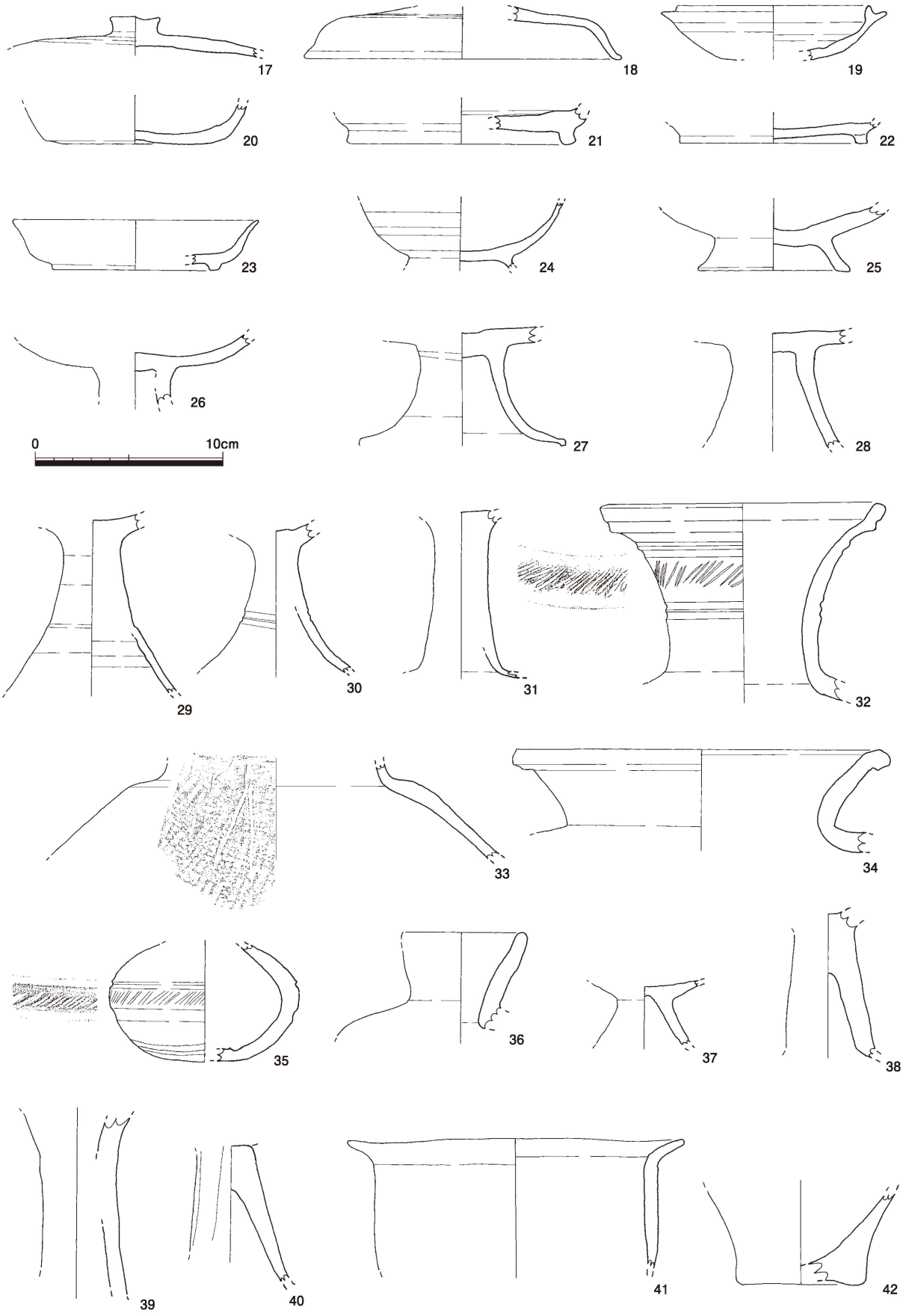
第６図　ピット出土遺物実測図(1/3)

9.4ｃｍである。

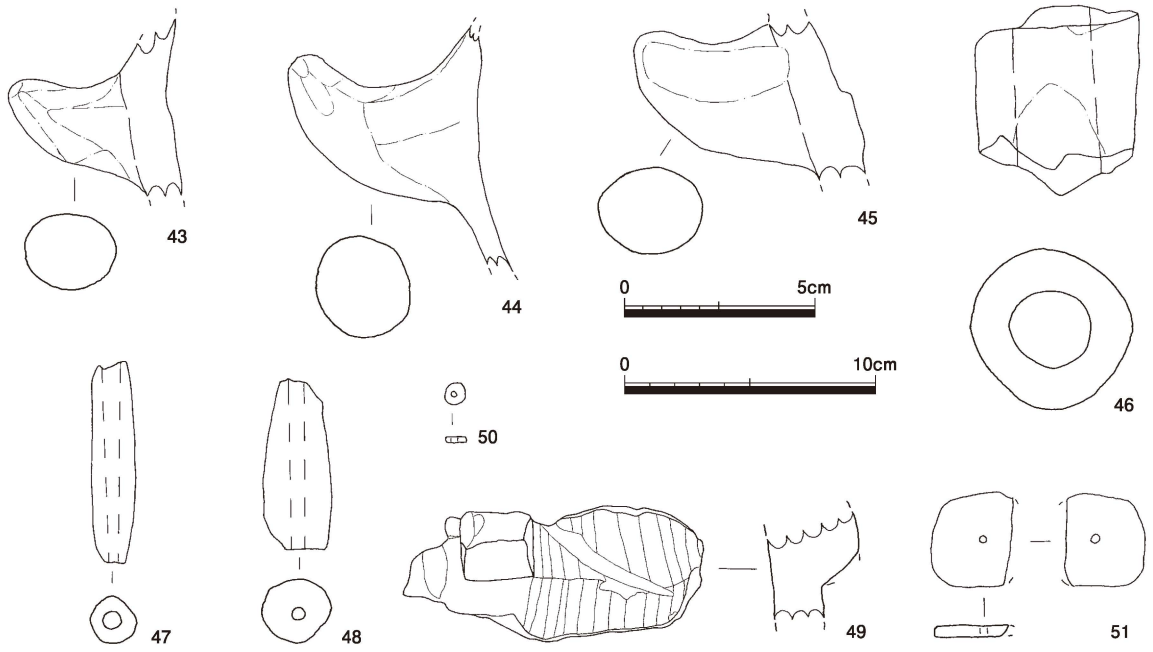
SX001「１．概要」で少し触れたが、調査区の南側に黒褐色シルト層からなる包含層をSX001とし、古代を中心に中世の遺物をまばらに含む。

出土遺物(第７、８図)

17～36は須恵器である。17、18は坏蓋である。17の高さは約2.1ｃｍ、幅は約13ｃｍ、つまみの径は2.6ｃｍが残り、回転ヘラナデを施す。18の高さは約2.8ｃｍ、幅は17ｃｍが残り、ロクロナデを施す。19～24は坏身である。19の高さは約2.9ｃｍ、口径10.2ｃｍ、幅12ｃｍであり、回転ナデを施す。20の高さは約2.1ｃｍ、底径は9.6ｃｍであり、回転ナデを施す。21の高さは約1.9ｃｍ、底径は12.2ｃｍが残る。22の高さは約1.1ｃｍ、底径は10ｃｍが残る。23の高さは2.7ｃｍ、口径は約13.2ｃｍ、底径は約9.1ｃｍであり、回転ナデを施す。24の高さは3.7ｃｍ、幅は約10.8ｃｍが残る。内面は回転ナデ、外面はヘラ削りを施す。25～31は高坏である。25の高さは約3.5ｃｍ、幅は11.8ｃｍ、底径は8ｃｍである。外面にカキ目を施す。26の高さは約3.4ｃｍ、幅は約12.4ｃｍが残る。27の高さは約6.4ｃｍ、底径は11ｃｍが残る。脚部に回転ナデを施す。28の高さは約6.4ｃｍ、幅7.8ｃｍが残る。脚部に回転ナデを施す。29の高さは約9.8ｃｍ、幅は9.2ｃｍが残る。30の高さは約８ｃｍ、幅は約８ｃｍが残る。脚部に回転ナデを施す。31の高さは約９ｃｍ、幅は約６ｃｍが残る。脚部に回転ナデを施す。32～34は壺である。32は高さ約10.4ｃｍ、口径約7.5ｃｍが残る。一部に自然釉がかかる。33は内外面共にタタキ調整で、外面にはヘラ記号を施す。34は高さ約5.5ｃｍ、幅20.2ｃｍである。35はハソウである。高さ約6.2ｃｍ、幅10.0ｃｍが残る。36は瓶である。高さ約5.5ｃｍ、口径約6.0ｃｍである。後円部から肩部にかけて自然釉がかかる。37～45は土師器である。37～40は高坏である。37は高さ約3.2ｃｍを残す。38は高さ約7.7ｃｍ、幅約4.9ｃｍを残す。39は高さ約9.6ｃｍ、幅約5.7ｃｍを残す。外面はナデ調整である。40は高さ約7.2ｃｍを残す。41、42は甕である。41は高さ約７ｃｍ、口径約18.0ｃｍである。調整は風化が激しく不明である。42は高さ約5.0ｃｍ、底径約3.5ｃｍが残る。43～45は甑である。46は羽口である。長さ約7.5ｃｍ、幅6.2～6.5ｃｍである。色調は橙褐色から赤褐色である。47、48は土錘である。47は長さ5.3ｃｍ、幅1.2ｃｍ



第７図　SX001出土遺物実測図(1/3)



第８図　SX001出土遺物実測図(1/3、47･48･50･51は1/2)

である。

48は長さ4.4ｃｍ、幅1.8ｃｍである。49は石鍋である。長方形の縦耳のついた古手のものである。鑿の削痕が認められ、外面は全体的に煤の付着が認められる。50は滑石製の管玉である。高さ1.8ｍｍ、幅5.5ｍｍである。51は滑石製の有孔円盤である。厚さ３ｍｍである。

３．結語

今回の調査は109.8㎡と調査範囲はわずかであった。出土した遺構は溝２、土坑４、ピットが多数見つかった。南側は包含層に覆われ、その下からの遺構検出であった。北側は南側と比較して溝１、土坑１、ピット２とわずかであった。

溝（SD002）は調査区の東側で調査された、比恵遺跡群第74次調査で確認されたSD03とつながる（図９）。時期は古代に比定できる。SD002より北側は南側と比較して遺構の密度が薄かった。

土坑（SK007、SK024）は古墳時代後期に比定できる。

第９図　第128次調査で検出された溝（1/1,000）

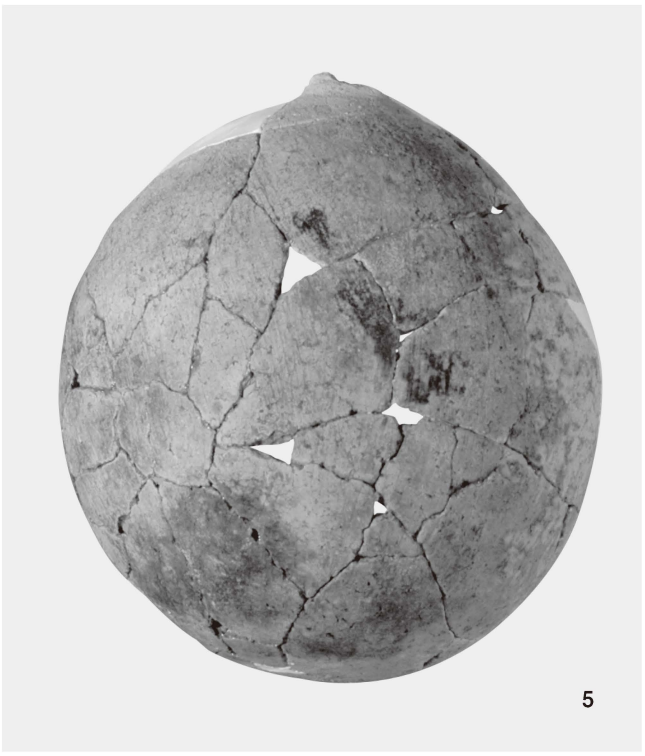
図　　版

第128次全体写真（北から）

第128次全体写真（南から）

SK007完掘状況（南から）

図版２


5

7

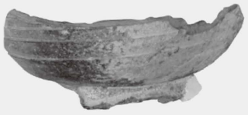
13

11

12

16

19


24

25

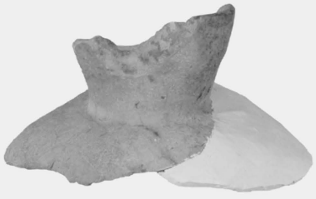
32

26

29

30

42


36

49

47

48

50

51

第128次出土遺跡

報告書抄録

ふりがな	ひえ69　―ひえいせきだい128じちょうさほうこく―
書名	比恵69
副書名	―比恵遺跡第128次調査報告―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1273集
編著者名	清金　良太
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号　　TEL 092－711－4667
発行年月日	2015年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
ひえいせき 比恵遺跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 はかたくはかたえきみなみ 博多区博多駅南 6丁目19-2	40130	00127	33° 34′ 33″	130° 25′ 55″	20130408 ～ 20130516	109	記録保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
比恵遺跡	集落	古墳時代～古代	掘立柱建物 土坑、溝	土師器、須恵器、石製品	古墳時代終末期から古代の包含層、溝、土坑を確認

要約	比恵遺跡は福岡平野のほぼ中央に位置している。今回の調査地点は比恵遺跡の端で那珂遺跡に近い場所で行われた。出土した遺構は掘立柱建物、溝、土坑、ピットである。溝は74次調査で確認された溝と繋がる。出土遺物はコンテナケース17箱が出土し、土師器、須恵器、陶磁器が確認できた。

比　恵　61

―比恵遺跡第128次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1273集

2015（平成27）年３月25日発行

発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号
（092）711－4667

印刷　有限会社 アートプロセス
福岡市南区高木二丁目８番７号
（092）592－3381